

2023年  
復活祭 Web版



発行所  
カトリック高幡教会  
あゆみ編集委員会  
TEL042(592)2463

# 『キリスト者のしるし』である 『十字架』が大切である理由

主任司祭 ホルヘ・マヌエル・  
マシアス・ラミレス

私たちの信仰と結ばれている様々  
なしるしの中で、十字架は最も大切  
なしるしです。ですから、私たちは  
教会で十字架を見るようにし、また、  
私たちが家に十字架を持ち、あるい  
は、私たちは、胸に十字架をかけ、  
そして、自分の額・胸・両肩に十字  
架のしるしをします。

為に次のように伝えていきます。  
「十字架の言葉は、滅んでいく者にと  
っては愚かなものですが、わたし  
たちは救われる者には神の力です。そ  
れはこう書いてあるからです。『わた  
しは知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢  
い者の賢さを意味のないものにす  
る。』知恵のある人はどこにいる。学  
者はどこに。この世の論客はど  
こに。神は世の知恵を愚かなも  
のにされたではないか。世は自分の  
知恵で神を知ることができませんで  
した。それは神の知恵にかなって  
いません。そこで神は宣教という愚かな  
手段によって信じる者を救おうと、  
お考えになったのです。ユダヤ人は  
しるしを求め、ギリシア人は知恵を  
探しますが、わたしたちは、十字架  
につけられたキリストを宣べ伝えて  
います。すなわち、ユダヤ人にはつ  
まづかせるもの、異邦人には愚かな  
ものですが、」（1コリント1・18  
〜23）  
初代教会の最初の三世紀の間には  
キリスト者のしるしとして十字架は  
使用されていませんでしたが、牧者

や魚や錨の「しるし」がありました。



魚



牧者



錨

十字架は悪人を死刑に処するため  
の道具であるため、否定的な意味を  
もつにも関わらず、キリストが十字  
架上で死んだので、十字架が救いの  
重要なしるしとなりました。  
十字架がキリストと救いの神秘を  
表す象徴になったのは四世紀からで  
した。  
十字架がしるしとして使われるよ  
うになったのには次のようなきつ  
かけがあったと言われています。  
西暦三二二年にコンスタンティヌ  
ス皇帝は、「十字架のしるしを持つこ  
とによって戦いに勝つ」という夢を  
見た。また、西暦三二六年にコン  
スタンティヌス皇帝の母親である聖  
エレナは、エルサレムで、キリストの  
十字架を見つけた。



九月十四日に十字架  
の称賛の祝日を行うよ  
うになったのは、東方で  
は五世紀から、ローマで  
は七世紀からです。  
初代教会時代の十字  
架につけられたキリス  
トの像も、絵に描かれた  
十字架につけられたキリ

ストも、キリストは、いつも長い白い衣を着け、冠を被っている、栄光を受けられたキリストでした。しかし、中世の時代から十字架上のキリストは痛みと苦しみの状態で表されます。この十字架が、私たちが知っている、十字架です。



十字架は神についての神学とキリストにおいての救いの神秘、そして、キリスト者の生活、この三つを一つに統合しています。

神は、私たちには目に見えない超越的な存在ですが、十字架は神が私たちと密接な関わりを持っていて、私を救うために十字架の中心となるものなのです。そして、十字架は私たちの信仰を伝え、また、私たちの信仰を宣言するしるしです。私たちがしている十字架のしるしを最初に、人はキリストご自身です。それは、キリストが十字架につけられた時でした。

第二奉献文に次の言葉が書かれています。

「御子は……救い主、あがない主として……手を広げて苦難に身をゆだね」。また、ゆるしの第一奉献文には次のように書かれています。「主イエスは、天と地を結ぶ十字架上で手を広げ、あなたの契約を成就されました」。すなわち、十字架は神の愛を表すしるしです。超越と死と復活によって人類と神の和解と新しい契約を世界に与えたキリストのしるしです。

キリストの体がりつけにされた十字架は私たちが新しい民であることを表します。すなわち、この十字架のしるしは、十字架につけられることによって私たちが救ってくださったキリストの、私たちが弟子であることを宣言しています。

十字架はイエスの復活を表すしるしであり、信徒の信仰生活の希望を表すしるしであるので、教会が、教会の祭壇の奥、あるいは、祭壇の近くに置く十字架上のイエス様は復活されたイエスではなく、十字架につけられていないキリストの体でなければなりません。

九月十四日の十字架の称賛の祭日以外に、十字架を礼拝するのはミサがない聖金曜日だけです。聖金曜日はミサはありませんが、十字架の称賛の祭日のミサと同じように主の受難の記念の中で十字架の礼拝を行います。

四旬節の間、毎週金曜日、特に聖金曜日に行われている十字架の道行きはカトリック教会で中世末期から行われている儀式です。これは、イエスが総督ピラトの官邸（プラエトリウム）から刑場のあるゴルゴタの丘までの道のりを十字架を背負って歩いたことを私たちが思い起こし黙想する「via crucis / 十字架の道」と呼ばれる信心業です。

この場面を模すためにカトリック教会では聖堂の壁にイエスキリストの捕縛から埋葬までの十四の場面の聖画像が掲げられています。一九九一年に教皇ヨハネ・パウロ二世が第十五留を加えられましたが十四番目の留までの祈りを奉げるのが一般的です。最後の十五番目の場面は復活の場面です。祭壇に向かって祈ります。儀式は、一つ一つの留で、黙想を伴う祈りです。

十字架の道行きの、次の三つの留、「イエス、十字架上で息をひきとる」、「イエス、十字架から降ろされる」、「イエス、墓に葬られる」という留は、イエス・キリストが、十字架を背負って歩いている場面で、十字架に関することが加わっている場面です。十字架の道行きは十字架を救いのしるしとして、すなわち、主イエス・キリストの受難・死・復活のしるしとして思い起こす時であり場です。

最後に、私たちは主日のミサの中で私たちの言葉で信仰宣言を唱え、すがこの信仰のしるしが、十字架です。私たちがイエス・キリストに忠実に従うために、マタイ福音者は私たちに次のように伝えていきます。「イエスは、それから弟子たちに言われた。『わたしについて来たい者は自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。』」

私たちが真のカトリック信徒である為に、私たちがイエス・キリストの弟子になる為に、十字架のしるしにある深い意味を理解いたしましょう。主のご復活、おめでとうございます。

### 教会委員会だより

教会委員会 委員長

二月五日に信者総会が開催され、教会委員長を拝命しました鈴木英彦です。「風通しよく」教会運営を進めていきたいと思えます。よろしくお願いたします。

二月五日の信者総会后に二月の教会委員会が開催されました。主だった事項をご報告したいと思います。

#### ●二〇二三年度司祭人事異動

現高幡教会管理者のホルヘ・ラミレス神父様が四月十日付で高幡教会主任司祭に就任されます。そして、主任代行を務めて下さった多摩教会主任司祭の宮下神父様は三月五日主日のミサ司式を最後とされました。約半年間でしたが、色々ご指導いただき、ありがとうございます。ホルヘ神父様のご指導のもと教会委員会を運営していきたいと思えます。

#### ●二月二十六日に開催された「姉妹教会交流会礼拝」

高幡教会を主会場として、対面及びZOOM参加ができるように設定しました。参加は、高幡聖堂二十名、オオンライン約十名、由木教会四名、オオンライン約十三名、永山教会七名、オオンライン七名、合計六十名くらいです。

オオンラインではありましたが、三教会が一致して祈りの時を持つ豊かな礼拝になりました。関係者及びご参加くださった皆様にお礼を申し上げます。来年は永山教会が主会場になります。

#### ●二月二十二日に東京教区より「コロナ感染防止策の緩和」が発表

三年に及ぶコロナとの戦いが少しずつ緩和されてきていることは、大きな喜びです。そして、高幡教会のミサや諸活動も徐々に緩和・再会していききたいと思えます。

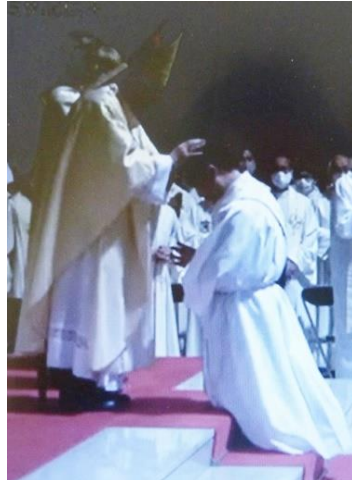
ミサ中の歌を皆で歌うことも四月八日の復活徹夜祭にマスクを着けてですが、全面再開を目標にしてみました。「主の復活」と共に高幡教会にも歌声が響くことは感無量です。

#### ●三月二十一日（祝日）司祭叙階式

教会学校で大変お世話になった下瀬智久助祭が司祭に叙階されました。高幡教会で初ミサを行っていただく予定です。その際にお祝いを贈りたいと思えます。下瀬智久様のご活躍を皆様と共に祈りたいと思えます。



司祭叙階式後、挨拶される



大司教様から授けられる

下瀬新司祭の好きな聖句  
「主は豊かな贖いに満ち  
慈しみふかい」(詩編 130)

※写真は叙階式ミサの  
ライブ配信から抜粋しました。

### 幼児洗礼 おめでとうございます



3 月 12 日 11 時ミサの中で幼児洗礼受洗式がありました。ご家族が主キリストの愛で満たされ聖家族にならう恵みが与えられますように。



●教会掃除について  
地区の方々にご協力をいただいています。ありがとうございます。  
●新しいオルガンについて  
皆様の献金により五月二日に新しいオルガンが納品されることが決まりました。そして、オルガンの祝別式と「仮称・ミニ・コンサート」と茶話会を五月十四日十時ミサ後に予定です。ご期待下さい。五月十四日のミサは一回にしました。よろしくお願いいたします。

### 姉妹教会交流会礼拝報告

教会委員会 渉外委員

二月二十六日（日）春を思わせる穏やかな午後、日本ホーリネス教団由木教会、日本基督教団永山教会、カトリック高幡教会が共に祈る姉妹教会交流会礼拝が行われました。  
今年も一堂に集まることはできませんでしたが、高幡教会を ZOOM の基地局として三教会がインターネットで結ばれ、各教会に集まった方およびオンラインの方、合計六〇数名が参加されました。今年のテーマは、「善を行い、正義を追い求めなさい」（イザヤ 1・12〜17 参照）。  
礼拝で用いられた冊子は、キリスト教一致祈禱週間の資料として、プロテスタント教会とカトリック教会が協力して作成され世界中で使われています。  
礼拝は高幡教会でのオルガン演奏・聖歌に始まり、小枝功牧師・小枝黎子牧師（由木）、小手川牧師（永山）、ホルヘ師が司式者として招きのことば、祈り、聖書朗読、説教などを担当されました。ホルヘ神父様が説教の最後に「皆さんに次の質問をします。『悪を行わないことは、善を

行っていることなのでしょうか」と語りかけた言葉が心に残りました。私たちの世界には対立が渦巻き、解決が見えないまま時が過ぎていきまします。「善を行い、正義を追い求めなさい」、紀元前に語られたイザヤの言葉が、今ここに響いていることを思いました。  
礼拝後には各教会の紹介、参加者から感想などが述べられました。オンラインではありましたが、和やかな集いの時を過ごして終了しました。コロナ禍が収束に向かい、姉妹教会として由木教会、永山教会の方々と、より積極的に交流できることを願っています。



参加者が映るモニター画面



礼拝後の高幡教会紹介時の様子